

# 搬送困難 1カ月で5割増

## 年末年始 コロナで病床逼迫

新型コロナウイルスの感染が再び拡大する中、119番で救急搬送を要請した患者の受け入れを医療機関に3回以上断られるなどした「搬送困難事例」が、年末年始は1カ月前と比べて5割以上も増えている。総務省消防庁への取材で明らかになった。新型コロナウイルスの患者で病床が埋まり、救急患者を受け入れる医療機関が減っていることが原因とみられる。

搬送困難事例は、医療機関が「搬送困難事例」をいう。同庁が28日～1月3日の1週間で、開の受け入れを少なくとも1県庁所在地など救急搬送者計2179件と、1カ月前の3回以上断られ、現場に滞りの多い全国52の消防本部を（11月30日～12月6日）の1410件より55%増え、昨年の12月1410件より55%増え

た。2179件のうち、東京消防庁の管内は約半分の1014件で、1カ月前の631件より61%の増加。大阪府消防局では271件で42%、横浜市消防局では173件で106%それぞれ増えている。横浜市消防局によると、同市の173件のうち、発



※総務省消防庁の調査結果より

熱症状があったのは約6割で、中には14の病院から搬送の受け入れを断られた人がいた。川崎市消防局では市内で搬送先が見当たらず、同市から救急車で約1時間かかる相模原市の病院に受け入れを要請したケースもあった。

年末年始の救急搬送困難事例が前年同期と比べても45%増えていることからも、総務省消防庁では、新型コロナウイルス患者の対応に追われ、病院が通常医療に手が回らなくなったことが主な理由と分析。「第3波」による感染者の急増に伴い、医療提供体制が逼迫したことの証左と言える。新型コロナウイルスと診断された場合、本

来は保健所が受け入れ先の病院を調整するが、同庁などによると、自宅待機と判断された人が夜間に体調が悪化し、救急搬送されるケースもあったという。

在宅医療に取り組む長尾クリニック（兵庫県尼崎市の長尾和宏院長によると）、1月初旬に抗原検査で新型コロナウイルス陽性と診断され、自宅待機になった兵庫県内の60代男性は、夜に39度の熱と呼吸器症状が出た。男性の妻が保健所に電話すると、「救急車を呼んで入院できる病院を探してください」と言われたという。長尾氏は「感染者の急増で保健所が対応しきれず、救急にも影響が及んでいる。ベッドの空きがなくなってきたことで、胆のう炎など通常の入院調整も以前より時間がかかるようになった」と話した。【石田泰津子】

毎日新聞  
令和3年1月11日